

【結論】2年間の生物学的製剤の投与によって多くは骨関節破壊の進行なく経過していた。

3 慢性拡張性血腫の画像と臨床像

山岸 哲郎・生越 章・川島 寛之
佐々木太郎・堀田 哲夫・遠藤 直人

新潟大学大学院医歯学総合研究科
整形外科学分野

【背景と目的】1か月以上の経過で増大する慢性拡張性血腫 chronic expanding hematoma (CEH) は比較的稀な疾患とされ、外傷や手術を契機に発症する。当科で7例のCEHを経験したので報告する。

【対象】男性6例、女性1例、年齢は53-89(平均71歳)であった。外傷歴、症状、大きさ、血液検査所見、MRI所見、組織像、治療について検討した。

【結果】主訴は5例が腫瘍、2例は痛みであり、発生部位は骨盤3例、臀部1例、大腿1例、膝1例、足底1例であった。外傷歴は5例に認め、大きさは3-18cm(平均11.7cm)であった。血液検査では肝硬変の2例で血小板減少を認め、血友病Aの1例で凝固異常を認めた。MRI所見においてT2WIで高信号と低信号が混在するモザイクパターンは当疾患で特徴的な画像とされるが、本研究では5例に認めた。治療は6例で全摘出術、1例は自然消失した。全摘出した6例中4例では術後も血腫が貯留した。そのうち3例は穿刺の継続とミノサイクリン局所注入を施行し、1例は出血を繰り返して感染を合併した後に治癒した。現在は1例で画像的に血腫の残存を認めた。組織採取が可能であった6例は全例で悪性所見を認めず、線維組織と凝血塊を認めた。

【考察】CEHの発生には先行外傷が存在するとされるが、当科でも5例で外傷歴を認めた。凝固異常を3例に認め、そのうち血小板減少の2例では術後も持続出血があり、凝固異常が血腫形成に関与している可能性がある。MRI所見は文献的にモザイクパターンを示し、辺縁に被膜を有すると

されている。当科では同様の所見を5例に認めた。MRIでは悪性腫瘍との鑑別が困難な例があり、生検を行っても悪性細胞を検出できない症例もあるため治療は全摘出が望ましいとされる。当科では6例で全摘出した。また全摘出後に血腫と出血が持続した4例ではその全例で大きさが10cm以上、深部発症であった点が共通していたことから手術が困難で、被膜が残存した可能性がある。

今後はIVRを合わせた非侵襲的な治療も期待できる。

4 軟部腫瘍と鑑別を要した下腹部発生子宮内膜症の検討

有泉 高志・小林 宏人・畠野 宏史
村井 丈寛

県立がんセンター新潟病院整形外科

【目的】体表発生子宮内膜症の特徴を調査検討した。

【方法】軟部腫瘍が疑われ整形外科を受診した子宮内膜症例6例を対象とし、臨床所見、MRIでの所見の特徴を調査した。

【結果】局在はいずれも右側発生であり、5例は尿管と連続、1例は帝王切開時の手術瘢痕と連続していた。6例すべてが婦人科疾患の既往、合併があり、6例とも疼痛を認め、5例は生理に伴う疼痛であった。MRIではT1、T2ともに境界不明瞭な腫瘍影であり、筋肉と等信号であったが、多くの例で内部に点状の高信号を認めていた。

【考察】異所性子宮内膜症は稀な疾患ではあるものの、上記のような臨床的特徴を有しているため疑うことは容易と考えた。MRI上はデスマイドなども類似した信号を呈することがあるため、鑑別のためには組織診断も検討する必要がある。